

近江輿地誌略

蒲生

十九

			九	和
		一	一	書
		五	一	門
三	五	三	一	
冊	架	函	號	類

庫	文	閣	內	
一	七	函	三	和
冊	架	冊	一	書
九	一	五	一	
號	類			

內閣文庫	
番號	和 9151
冊數	30 (19)
函號	174 161



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



連続してカ公工と業とを永正天文のころまで

あり後に威徳院門前山源流と志々寺と威徳

院、淨教院のともあり、目源流譜と考るに

るは貞宗古撰の圖に於て西宗の父子あり

と述に似て製造せし者と其令味うみあぢとこれ

○芝浦村　　るは村のやにあり芝浦氏ハ七代

の屋形經方公四男以実伴度井上清井津田

種村以後胤あり十一代の屋形信綱公ハ小條

後村云より當國一處欣納於御書書出づ時に

芝浦の屋庄ハ先經より素徳のより一所ありに依

て尾張長忌の庄を磐城に賜る申東艦に

由る

○明智の寺屋敷に　　芝浦村にありけし貞

安上人や〜きあり等あり

○素家寺　　芝浦村にあり不謂素家の業

師をあり今考換とくに証記二卷あり其他

八喜蓮院宮遺通院の筆上卷の端一紙並あ巻
の外^外額ハ震平あ巻の間に^画画あり 去傳
形類を輔光蔵^リ妻ありあ巻の貞^女虫に交
元年八月十七日と志^がり是利^年年^後植^リ判
ありあ巻^終に長く^詞詞^多多^一其要を^取
其略に曰に石^葉葉^平平^ハ日本^の最初^抄抄^葉
朝の^聖錫^{あり}天地^を以^てに^われ^る後^論論^{とな}
海^上に^一株^の葉^のは^出生^せり^けれ^三の^葉と

むま^一ハ^令鳥^と重^くも^あれ^ば後^を如^く一^ハ可^也
と化^{して}板^のなり^に遊^はり^て是^天天^りと^てら^を見^え
月^光此^意迹^{あり}一^ハ地^にと^りと^山と^ある^今の
葉^山是^{あり}其^形ハ^葉に^てを^葉紅^葉と
交^ゆ苑^天蓋^のと^りに^微山^と云^は
の葉^{あり}山^を微^とと^云は^り後^并
家^他に^なり^り同^名あり^一上^宮そ^子三^十三^歳の
厄^難と^して^んが^{あり}子^手觀^音の^像を^彼山
の^石に^安置^した^ま昂^精會^を建^て觀^音山

寺と号せし之十之新巡礼の地あり尾按に

醍音寺のまにして平比奈あはれ 杯亦當山茶実寺ハ病所

消滅此多揚不老不死の仙窟なりあまづ 中も薬師

如來ハ天智天皇此所あまづ 桑津の地に異病を

とりて病癒に志所むけに等江の姫宮阿闍梨あまづ

女病ふとつりまみあまづ 水くみ此海あまづ たら上あまづ に妙

音觀世音梵書海潮音彼世間音是名須本念

と云彼あまづ の声あまづ 縁以波のともまら知と云んと思あまづ

之中をふよにあまづ 踏踏あまづ の光七音にあまづ とんてまめり

と天皇奇異の思ひとあし御持僧定惠和為とあり

て疑あまづ なるに知当此云音役行者留士あまづ 終項あまづ 上

にハ音をるるに西音にあたりて踏踏の琵琶あり

半月の西あまづ 西あまづ にとら侍に碧羅布天蓋あり日上

にかけり東に天女をまき線竹の音をるあまづ ぬれ

と存そ なるに琵琶と云ハ此に此湖天蓋と

是之法ハ今ハ微少也天人樂を奏して淨世

石を八天樂石と名づく辨賊矢ハ昂八大新との愛
他湖水下ハ竜宮城あり城に志んぬけり天也
撫復にうく彼醫とや其 出況所恨 忽に年愈
あふへき 臨愛なり 天皇 昂彼光のさせる如と懸一
て七光寺と建立一 定惠和尚に依りて湖之に
向て餘財の法舎を修せしる 竜宮城の東門
粟井の磯多に生身此藥所 也其 光以 蘇夏と
して湖上ハありと此満一 まで是別徳園精舎也

本寺醫王名逝に傳しきをあり 彼出現したる如
と名逝が續と云 長梅寺に附舎の儀あり 膳不勝正字等
或ハ是安ふ 仰り 善世に仰り 塔 壽の相円
寺にうく 飯用也 洗葉師 仏醫王 名逝
にうく 善逝が 傳と云 後ハ 志んぬ あり 終に皇女此病平
愈するのこにあはれ 疾の病苦 患除を 大日本湖
中より浮出てもままと のせきう 南山此磯にともり
治けく 飯ぬい 如を 牛并が 鼻と云けに 梵天と
あまりうと 若弱と 他とて 也其 志んぬき 蘇光
善逝小舟に 既して け山に 死に 法う たり 不彼留

踏石北西小岩跡の跡北跡今にあり 長按き

石屋に如ふ似る跡あり 跡の跡水にハあり 延慶公
可蘇の石河に石屋とていふがやき 此石二あり 接石 林寺
村に地石あり 跡跡 補ふハ石あり 安藝公佐に舎石あり
西に石あり 雲石 鏡石 鳴石 兼石 菱版石 石 蕨石 地石 奠等
と云ふ 小室 細目 心 跡 凡そ 記 南 海 古 蹟 記 吳 郡 訪 山 録 卷
花 淑 派 杜 陽 雜 編 林 水 派 吳 中 勝 記 如 異 老 金 卷 紀 年 三 卷
吳 寧 海 控 條 派 桂 海 虞 備 志 卷 三 多 載 たり 備 考 記 加 多 奇
石 色 あり 巴 石 西 に 馬 の 足 あり の 也 々 あり 毛 月 然 々 あり 一 光
を 點 あり 跡 あり 大 梵 天 著 焉
と 記 され あり 跡 あり 一 金 卷 の 精 舎 と 建 之 一

白鳳六年十二月八日 皇恩と導師とて 藤原
と安重と一なるふと後を國成順天皇遂にけ山小

所幸ありて 踏踏石北 是の跡とあり 世に
之十あり 二の姿をあり 若此人の母跡とこれ
と 所 依 款 とも あり 海に 若 皇 明 天 皇 あり 所 治
世ハ 十 年 姿 福 麗 竜 之 の 女 此 八 葉 竜 女 の 跡 身 云 佐
八年ハ 法華の 院 時 表 あり 云々 長 按 考
に け 緣 記 如 何 あり 人 此 作 法 也 虛 傳 の こと 多 々
伝 氏 彼 是 の 傳 へ 相 考 せ ば 天 智 天 皇 一 葉 傳
類 云 々 不 審 法 師 之 傳 傳 之 類 云 々 不 審 云 々

天智天皇ハ志賀の大伴小碓ノ子小栗^栗伴ハ今ノ
倭前城下ノ町此處あり 帝定惠と名て後と
曰クふに定惠等々曰昔後引者富士山に上リ
こと云く定惠ノ一後引者ハ人皇四十一代 文武
天皇ノ朝の人あり 皇孫ハ水鏡元年^書秋^書に是
より始れハ別 天智天皇よりハ後代ノ者あり
天智帝ハ人皇三十九代ノ 帝あり こと云く是を
遠と云くハ一況首と云者に托のそと也 服を被と

天智一白鳳六年十一月八日 定惠と導師と
兼実寺と通立はるのそ 仍あべ一元年秋^書定
惠ノ傳を按ずるに白^雜紙^雜曰自に入唐ノ^書学^書始
十^書載^書唐ノ^書調^書唐^書元年^書百^書海^書使^書に^書付^書て^書か^書る^書白^書鳳^書
七年九月ありとあり 然別ハ白鳳六年^書自^書に^書導^書師^書
法^書心^書道^書ヲ^書推^書あ^書る^書也 元^書明^書天^書皇^書兼^書実^書寺^書に^書以^書奉^書
此^書と^書類^書あ^書る^書に^書あ^書る^書代^書元^書年^書秋^書年^書表^書に^書か^書つ^書
其^書と^書是^書に^書以^書年^書表^書ハ^書師^書孫^書淳^書唐^書代^書の^書そ^書に^書か^書れ

すもハ一事とのこと^る思^ふを^り忘^るる^にけ^しと^る事^ハ思^ふ
くハ^ハ仍^もあ^らず^し一^ノ上^ノ所^ノ判^定基^部部^部僅^の款^{あり}安^化
あ^らべ^し治^世八^年八^法華^法師^を表^示示^すと^ハ何^れ
名^ハ順^天皇^の所^治世^ハ七^年あり^八自^にあ^らは^し何^れ
と^表示^すと^ハ亦^りつ^と七^仏藥^師と^表示^すと^ハ
と^云べ^しけ^れ

醍醐天皇御編旨

藥師寺

絹百疋

綿一疋

長布一疋

稻一十石

水油一疋

西至 近江國蒲生郡東限^北修^南蒲生^東限

山長^南限^高坂長^西限^子条^畔小

限大^大限^大

以前指上件以爲最貴經乃一切大系小系
經讀抄抄疏抄等爲轉讀此以經令以經也
限日月窮未來際教納彼寺永爲學依此後
願方上天皇於諸滿有弗擁護法衆薰贊
万病消除壽命延長一切所願皆令滿令令
成佛道人必後被辱十方三世諸佛菩薩一切
聖羅經當處此獄無救知中永先出方一切
法人衆捧天毫方令割蜜道此護法護塔大善神

王及普天率土有大威方天神地祇七廟高灵
英佑余立切切大臣將軍之靈等共託天禍永滅
除若不托觸教勤以者世々累紀降出帶子
乞學岸

天平感寶元年閏五月廿日

和御系

左和正一位

右大臣大宰師橘岩祢德足

右大臣從二位後系經良成

○須田村

○安土村

八幡町より一里あり安土山のりこ
中古織田信長安土山に居城あり一時的に繁
昌してこの村を本としてける二之里が間の熱岩
を安土と呼り今も旧石に如たりを附け町ハ
八幡へ引移せり事ハ八幡条りに志る也

○安土城址

別安土山にあり安土山より二

町伴辺一里半余頂上に天守あり今に其跡石垣

等の跡顕然たり本丸二の丸との丸等の間敷

言他詳に志れざり

家康公及河津秀吉武

森ゆき等のまき木のかえを御つ申條為堅武井肥後

織田信忠長谷川竹織田七多衛 森蘭丸 福富平

左衛門右衛門九郎左衛門菅若九右衛門 堀久左衛門

が屋敷あり安土山の内に藤師山笛吹尾

源えん左衛門さゑもん鼻梅若なせむしあみが鼻なせおれ尾永尾おなが等あど云

如可り忠云一新一採け城ハ織田信長より

一、惟任女御左衛門長房を新を織田軍記
に田^田安去御天守の次牙去麓去麓此より十二
より余以上は七重の天守を造りて謀に前代末
陣の經營あり先下を重ハ石籠の上と去麓に
同^同ひら二重ハ以上は麓より南二十より東西十七
よりより十六より半これより柱敷二より中を中
柱長よりハより大より一丈六寸六寸^或ハ一丈二寸口方
の木あり御座浦の内柱木より皆ハ黒漆^漆あり

以上は安の次牙の如十二より安令の強付墨繪の
梅苑將也永徳に修付られこれと^画成り同るの
田御去院と色あり是にハ臺寺の曉鐘の系
と色を画其前院に盆山の石を居とる次に
田安の御御柳鳩の繪と色を繪ぐ亦十二より
安のより^繪鶴の繪と色を画くよりこれと^繪鶴の
間より名付られ其次ハ安の安奥口より安の
を安とる如を画く南十二より安のより漢庭の

の御座あり 柱敷 於台 百 甲 十六 本 之 此 等
四 重 目 西 十 二 等 繪 ハ 巖 上 に 龍 虎 之 戦 の 繪
あり 南 十 等 竹 を 画 して 竹 の 子 と 名 付 之 此 次
十 二 等 松 を 画 して 松 比 呂 と 云 東 八 等 松
相 桐 鳳 凰 の 繪 次 ハ 等 小 舟 由 耳 と 滝 以 あり
巢 文 牛 と 牽 牛 之 取 之 出 之 左 御 之 舟
一 一 之 此 等 画 之 次 小 舟 七 等 補 繪
ハ 一 一 之 金 泥 之 行 之 次 十 二 等 補 繪

内 西 二 間 の 船 之 子 鞠 の 本 を 画 之 其 次 又 八
等 補 度 之 の 糸 と 画 之 石 燈 籠 比 呂 と 名 付 之
五 重 目 繪 ハ 南 末 の 破 風 比 呂 比 呂 之 半 の 御 座
あり 小 舟 の 比 呂 と 之 を 云 六 重 目 八 角 目
方 目 之 繪 あり 内 外 之 比 呂 外 柱 兼 色 内 柱 ハ
金 泥 あり 繪 比 呂 新 之 成 道 説 法 の 次 舟 十
大 舟 子 之 圓 あり 漸 縁 之 比 呂 鬼 之 画 之
端 板 比 呂 龜 之 画 之 高 欄 擬 室 楹 彫 之

あり上の七重目之より下御産家の内皆令
泥ありぬぐも亦令泥あり口方の内柱に昇
竜座跨天井に天人蓮向の舩たぐくも画
り、御産家の内北繕ハ之皇太子孔門十哲
高山の口略晋の七賢等も画せしれ狭り
織あり敷六十條皆黒漆あり内外の柱也
して漆漆はく布とさせしれ其上堅地にして
黒漆漆に塗たり織心若法々英法くまを習法

一

細工人の次牙

上二重の金具

後藤年日部これとあり系田舎

の上より年傳を

二重目より

系部對所係金具あり

御大立探梁

是部又左角門

小細工はた

宮西遊ち事門

漆師

首刑部

屬燒

唐人一觀に信付られ奈良の

者に燒せしむ

御書信事抄

本村次郎長

安土山紀文

古人曰太山之前難為山大海
之前難為水日城六十餘列之
一列曰江江左有山名曰安土
其山不在高其名高於大山也

蓋夫非山之獨得名在寬仁大
度人居焉也劉夢得不豈曰乎
山不在高有仙則名水不有深
有竜則吳也夢得之一言可逆
按馬層巒之崎嶇乎上者自焚
金城也滄波渺流乎下者自焚
湯地也自天地開以來雖有此
山一人無識者矣柏原帝王的

的令孫平，清盛公二十一代之
華胄前，右府君者禁庭之綱紀
武門棟梁而實大，縱聖也先是
天正四年，春一見此山，便識
古城地，開闢洪基，摧輿于此，兵
力士星馳，揚名工匠，近霧連運，斧
則不終三年，而其功成矣，潛慮
夫百大之石壁，千萬間之大廈

何翹大士之力，工匠之巧，乎唯
流出府君之一胸襟而已，目機
之所明，意匠之所巧，離婁明公
輸子之巧，不可及者也，峻
宇高堂之凌碧，虛者也，極夜摩
都吏之壯麗，兮直欄橫檻之從
翠崖者，也，盡泰樓魏闕之華美，
兮布地，硬碱者，兼露內潤，葦屋

瓦甍者帶霜外光西湖月之上
玉階者供府君之夜遊也南浦
之雲飛盡棟者催府君之朝吟
也颯々松風之動金鈴声呼万
歲山耶紛々白雪之映珠簾影
合合千秋窓耶摧門貴户之圍山
穢穢笑也遠山鱗翠也盡是奧不
丹漆漆點點聖室塔之突兀出山間

者疑繪遠寺釣船之浮蘆
邊者怪園歸帆濟湘十里風景
嘉陵三百里山水不可同日語
焉英雄豪傑之擁繡鞍出入相
府貴公子之翻錦袖往還干
官途爭紅花也憶兆民之富驕
者鐘鳴鼎食之家也見者久目
駭汗聞者拍手賞歎矣江東白

鷗懷意古閑江南梅花被化含
笑信及豚臭咸知草木當此時
市人歌于市野老打于野行者
遜路耕者遜畔雖堯舜民文武
民不可讓焉シカニミヤス加旃起王道衰
修神社仏閣之破續断桥平嶮
路是故四夷獻貢來復焉八蠻
解辨服膺焉ヒハ或臂俊鷹乞臣タラニ其

暮下ヒ或上ヒ良馬ヲ詰テ將タラニ予其麾下
吁策勳偉哉鳳凰現瑞麒麟呈
祥者非今時何時予祝望ス向キ所
謂大山之前難為山天下人亦
將曰安土山之前難為山野衲
雖蓬衡葉列擗散陋姿管見ニテ此
名山豈無感慨乎早綴平詞者
八韻述盛舉之万乙伏乞嘆覽

六十杖梁第一山丸松積翠白
雲開官高大似安房殿城嶮固
於函谷関若^{コトヲ}不^レ唐虞治^ニ天下^ヲ必^{ラス}
應^ニ梵衆出^テ人間^ヲ蓬萊三万里^ノ仙
境留^ニ與^ニ寬仁^ニ永保^ス顏^{ヒラ}

岐下沙門玄興拜稿

右に記ハ天竜寺沙智院の第^築苑和尙、任付
これけ^り知に策彦禪退せり色濃花波年の南

化和尙、命^をこれ^に任^じて^は知^の爲^にの^うと^中され
是に任^じて^は南化ハ任^じ付^けり^に是^を再^ニ禪退^せり
一と大臣家類小御所をあり^り也^終に^終に^終
上^にや^れれ^ば年^毎一^紙に^以て^は他^ハ天^正六^年戊^寅に
如^來と^もい^ふる^を云^ふに^は源^氏繼^仁に^天正^五
年^丁丑^月候^長母^羽長^春と^いて^安土^山と
任^じて^は來^りて^は實^に任^じて^は向^後城^を築^と志^すや^らハ
徳^{あり}の^智軍^化に^日天^正四^年丙^午月^十七^日

信長御破年の要害と信忠に相後る近
に國に御居城ふさぐべしとて日賀多山と見え
所の名を改め安土と名付けし御營後所り惟
任の御居門長秀は佐和山の麓に御所此
とありは御營所は任所これ明智光秀の天守
建つてさうと中安房の里見義弘が之を此
天守と見えしひき亦因防の山に大内介
義興も三重此天守建つて如ハ一天守と見え

一のさぐり城ふれは安土の殿に御居し
大内の義長より角隈左系傳授後一けと頼
玄軍仕かこり上覧に其ふ多惟任に命せられ
地形と御南ふ二十回赤西十七りさう十二り
に安土をあらた二人心をさし建ると云い信長
と載して後光秀則に馬介光秀と大御とて
荒木山城も御軍同反し元軍仲妻木と計取
範賢曰く天文多御政矣今紫野御營正三宅

園防寺業初以下之千余勝を安去城にさ
むけ勢田はく山岳其作当系隆勢多橋と焼
落して防戦して成を田上に退くは智が勢
安去小引是より先安去城に水ととさ守城
のうふひとあんとを知く藩生志と命代に城中
此人とを具して己の日城に養も六月甲
明智左守助え去安去城に舟入於るにえ安去が
山傍の敗を聞か城を焼く板布を退くあり軍

侯表死に曰織田信長天正己酉正月城を近に
の安去に築を附の佐也曰水城巨るの前後
作場村あり後の安去ありと云く是より
ええ龜元年庚申六月信長中川八郎居つと
してけ地を守りむと云と搦見祀等にんく
あり

○百と橋 西見寺 寺山下の橋あり

○天神社 勸修寺 年暦詳あり

○観音堂 廿二、六百と橋と過過想見寺と
門に入路乃石にけり

○想見寺 安土山にあり百一の橋と過過
山門に入山門の左右ふ二里を安土とをきん山
想見寺の額を架を建勅傳日守あり中堂
のよら園あり丹通園と云之字の額を架を
布る観世音左右に文殊普華嚴の二大士と安
土と仙居の程に信長公の像ありけ左此方

に天雲院殿贈之品羽林仙居大居士の画像
あり是信長の嫡子信忠あり中堂の内に信長
の穢れ類あり画ハ特定永徳あり其繪ハそ
版魚が一斗角掛一本板掛一ツ人々算を掛
括とる如あり其建解一括とるをそと乳
袋とるにそりれげ世川げバ身を持あけろと云そに
安土城の度同にけり重徳大名の穢れせり
とありと云陰と頼田大明神の社ハ仙殿の

東に可り尚寺ハ信長在世に草創一開基
正伸剛下座元禪師と云僧あり 信長これと
推し任物せしむまより以來今に至る代も
織田家の氏族古續して任物も元禪師
ハ信長の從弟^{從弟}あり寺今京小妙心寺此寺
あり詳に安土山の圖に載是

○織田信長墓 安土山古墳墓の如に可り

也見寺殿贈大相國一平泰嚴大居士と号し信

長ハ松武天皇の後胤小松資盛の末葉織田
備後守信秀の子あり天文三年 甲午六月二十
八日生臺名^吉法師天正十年壬午六月二日
京師本能寺に逆臣明智日守 光秀がる
に裁せしむ其子孫家譜及詳に 將軍家譜織^織
田軍記信長他也見他大京^京圖等此諸書に
見へり

近江國樂地志畧卷之十九

長 寒川 辰清 編輯

蒲生郡 第六

○^觀觀音寺 觀音寺山にあり 別^{いりこ}石寺村の中

あり 畧縁起に曰近江必石寺村觀音寺ハ人

皇三十四代推古天皇此敷高聖徳太子此

河邊之江列十二箇而伽藍の中其^隨一あり

本尊^十十白大悲の像長^三三尺 同坐儀あり 最灵佛

あり西國巡礼之十二番あり世人あり芦浦の観音

寺とふ又ハ芦浦の石寺村にあり芦浦ハ浦

生あり尾梅尾梅に芦浦観音寺ハ粟中郡にあり別寺あり

此より芦浦の観音時古俗傳云往昔八耳を子日嘗

にけ知を過道れたまハ芦系此中に人の声ありそ

子見たまハ其容界形に似て人曲面の如く交隣

あり別言あり云我前生に殺生をよみ湖水の真鱗

をとろく我を後世とせけ業にまろく生を愛

してけ身と交たり願くハ聖者慈悲を念たま

を子あそれに見えし何を以てけ女を後せん人矣

又云願くハ母地に伽藍を建立あり大悲の像

を安したるを教思苦道を出し天上に生せん

と云を子茲に因て今の堂を建千子の像と

刻安をしたる又七日の間称名念佛して破

菩提をとむひたまハ其端教教の日天人降

を子を孫して我生天中交胎妙樂を唱て聲

者の御修 以て今ハ柳利天に生せり 故に來
て孫附と云く 龍と云く 案太子
傳 曆太子 越近江 巡檢志賀 粟
木等 郡諸寺 竟驛 駕粟津 命左
右 曰 我死 後五十年 過^過有^有一帝
王 近^近都 此 治國 十年 兵 近江
國 司 使 啓 曰 蒲生 河 有^有物 其 形
如^如人 非^非人 如^如魚 非^非魚 太子 謂^謂 左

右 曰 福始^始于此 又 太 成 經 三十
五 推 古 天 皇 七 年 淡 海 蒲 生 河
有^有物 形 魚 人 面 也 云 以 上 八 厚 卷 此
歡 音 冥 場 祀 に見 一 たり 臣 考 考 考 以 大 成
經^{一名先代} 曰 推 古 天 皇 二十 七 年
夏 四 月 己 亥 朔 淡 海 國 司 以^以使^使
言^言之^之 蒲 生 河 有^有物 晝^晝 夜 頻 浮 沈
其 形 如^如人 憂 声 甚 鳴 云 大 成 經 八

傳書あり 甲中へうに 惠書を伝せし書あり
にハ志うに

○觀音堂の地

觀音山にあり 山北高き十八

町許これ坂と名 土立六十間 伴嶺と駒殿取と云

十石嶺と名とも 圓嶺と名とも 不取ハ之ヶ谷 眼筋小

尾巾と云 によつてあり 之石と云 尾と云 峯に大石

あり 城跡ハ 觀音堂の 少上にあり 古傳 觀音

城繁業の時ハ 觀音堂ハ 山下にあり 城没落

の後今の如に 土法もと云 之石間として 大敷

と 建諸頭より 集り 政務を云 行処之石の

間の名ハ之 圓峯によろ 名ありと云 所在伝の

殿ハ其下今の 臺地 迫急ハ 跡あり 東ハ此

跡に 布施 溪谷 守内 栗峰に 古更 殿ハ同地

田名と云 跡あり 右考 此通名 垣礎ありの

傳あり け介 宅城の 坂にハ 本坂 亦坂 此

ま考 び考 木考 藤考 等考 とも 名を 傳あり 大門の 跡ハ馬

の門が通物庭七曲の田を^{そと}素沼^{すゐ}城^{ぢやう}の
通用水の池北を名もく^と尾水ハ清く海に
たりけ城北を武起^{ぶき}と^ま季定^{きじやう}より素沼城
治まて十八代年教旨有^あ日年寛治より永
祿まで相續北舊祿あきハ終り留る所あり
毛^も理^りあり 正親町院永祿十一年九月信長
義昭^{よしあき}をたをけて洛に都^{みやこ}く此日路^{ぢぢぢ}はくけ
城^{ぢやう}を攻^せめ^攻接^つけり義昭^{よしあき}父子^{ふし}河^かを妻^めと^逃逃^{にげ}亡^な

を^そ佐^さ々^さ本^{ほん}秀^{しゆ}岳^{がく}文^{ぶん}治^{ぢやう}年^{ねん}近^{ぢん}江^{かう}必^{ひつ}に^に封^{ほう}せ^しる^も
てより十^{じゆ}六^{ろく}世^{せい}凡^{ぼん}三百^{さん}八十^{じゆ}自^{ぢぢ}に^にて^て必^{ひつ}除^{ぢよ}る^も
佐^さ々^さ本^{ほん}の^のと^とハ^ハ禪^{ぜん}小^{せう}人^{にん}物^{ぶつ}門^{もん}に^に祀^{まつ}を^を親^{おん}音^{おん}山^{さん}より
ハ^ハ橋^{はし}に^にあ^あて^て一^{いち}里^り半^{はん}余^ああり^りけ^け城^{ぢやう}山^{さん}麓^{ふもと}生^{せい}神^{しん}邊^{へん}
の^の郡^{ぐん}界^{がい}に^にて^て神^{しん}邊^{へん}郡^{ぐん}ハ^ハ多^たく^く明^{めい}き^きり^り給^{たま}れ^まる^も
着^{ちやく}生^{せい}郡^{ぐん}親^{おん}善^{ぜん}寺^じの^の城^{ぢやう}と^と云^いふ^ふに^にの^のを^を

- 石^{いし}寺^じ村^{むら} ^{いし}親^{おん}音^{おん}寺^じ山^{さん}の^の村^{むら}あり
- 清^{せい}水^{みづ}鼻^{はな}村^{むら} ^{いし}石^{いし}寺^じ村^{むら}の^の東^{ひがし}に^にあり

○箕佐山

清水鼻の東にあり、その北に十町許あり、新湊郡此界あり

○古城址

箕佐山にあり、箕佐の城と云ふは是あり、佐々木義禎後在城を

○湯殿井

箕佐山の麓にあり、清水あり

○小松寺

箕佐山に村にあり、中宮親善小雲四大臣重盛公の建之あり、古傳に親善初

児の病瘵と穰了たまふ出候寺と信を瘵瘵と云ふ云々あり

○小松重盛公墓

小松寺界内にあり

○雲山

東老蘇村の北にあり、高き二十町

詳

○東老蘇村

清水鼻の南東にあり

○福生寺

東老蘇村にあり、清土宗安出

清土宗安あり

○ 縁大沼神社

東老蘇村にあり縁龍と

号一龍あり 其言甚卑淫盪浪あり 其大

畧と志るをふ 曰此は國ハ孝矣 天竺の所

地折々湖とあり一頃大澤と云者あり此地

に松枝等の良木とく一に忽に森と云

老蘇の處をり日本武尊東夷を征し海

上忽風に随て危し橋姫尊此所命に

うんと海中へ死入たまふ魂ハ龍と云 此列老

蘇の處に云海り 女人の年産を海と云たまふ

竜神橋姫の海中に入たまふ一に感し金色の

龍を頭にしたたまふに 吉光 備此武老と

して老蘇の處に埋令鶴ふと居付る今ふと

其のこしあり 昔 東夷 征伐の後 自持たまふ如の

縁と相敵して 縁大沼社と 縁ハ縁と云大

運ハ百七十三歳と云 昔と云あり 此縁に 縁

た人ふれハ 縁と云 三十 余町 坤此方 巽

山のふもとに小祠と建ふると云くは
畧記の儀了 信用しつゝ延喜式社名帳に
所謂真名社とあり

○^老老蘇森 今其跡を東老蘇西老蘇の

間小あり於色も往古ハ以色志あり
の東西に老蘇村も老蘇の處に記あり
老蘇武^武ハ老曾に傳り延喜式にハ延和に傳り
又本集歌枕等にハ息磯に傳り

堀川百首

忠房

涼^先くさ^先に^先森^先お^先あ^先色^先ど^先夏^先く^先ふ^先と^先ど^先月^先く^先れ^先に^先り

六百番歌

名にた^先る^先の^先處^先の^先下^先子^先も^先自^先わ^先り^先り^先と^先美^先あ^先ら^先ん

五章

定規

世^先わ^先い^先し^先紀^先ま^先り^先果^先ふ^先後^先ね^先く^先老^先の^先處^先乃^先平^先比^先と^先美^先ハ

玉吟集

赤隆

い^先く^先る^先る^先た^先が^先名^先を^先と^先り^先ぬ^先は^先ら^先り^先年^先を^先老^先の^先處^先の^先處^先ハ

又本集

經傳

をこごごをほほせごりけし所洞如老その里北道の間をゆく

松本集

蒸餾

ま人もねいそのあ北郷と名ごりあけり六月のくま

同

令

重厚ハたのう涙り唱傳のふまをさ蘇のあの下草

○西老蘇村

東老蘇北東南にあり

○東老蘇寺

西老蘇村にあり浄土末安と浄

蘇院の末寺あり

○西生來村

西老蘇村の東南にあり此を

順和名抄にいぬる西生の郷ありと今唱まひ

詳あり

○西福寺

西生來村にあり浄土末安と浄

蘇院の末寺あり

○泡子地蔵堂

西生來村にあり石解の地

蘇と安をまると古俗古傳能古け地に村并蘇行

と云者有り妹一人あり 往還に茶店を出し
旅人を怨息せしむ或日一信ありけ処にあり
茶店に身ひしに彼妹旅僧に慄く懇慕の
情を動し旅僧の春あませし茶を吞しに思
及るにあつて十月にして男子を産むと云
の後彼女件の子を懐き川にて大根と流す
今の大根流川 旅僧あり彼川の急に立留り曰く
と云い急を流す 嗚呼不思後あり哉女子が啼声經文ありと彼

女これと顧に三年以前懇慕せし女の旅僧
あり女其石を僧に預け寄ありとして其子
を喚に則院とありて消去を 然して曰以西
あき井と云 知の池中に貴き地蔵あり彼子
が善哉のるに建べいと水をかゆるふ果して
石佛の地蔵ありとを安置を今の地蔵と
あり件の信の弘法大師ありまよりしてあき井
の文字を改く生息と書今比西生村是

ありと云 長 拙よりに懐きとゆみ異をを働ハ
信懐の病あり 弘法の徳をわらんを却て弘
法と地下に祀るむ 坂田郡 醒井さきりに毛也こや 説
同く 説あり 粟本郡 多摩村の信皆同一多に
たると云 天地の間に氣生 胎生 或ハ卵生の類あり
ども 神代より以後 氣生の人あり 況一説の茶人
ふたれ 醒ありんや

○ 友室村 西生 東村の西南にあり

○ 御所内村 友室村の東南にあり 古伝
古言三 條院志より 任せたるに云と 村の
古老云 天安自中 中村と号し 氏家終に
あり 其後 貞觀年中 惟喬親王 出処にねを
海をこし あり 友室村の名を改て 御所内村と
号す 貞觀年中より 以来 村の水懐に 御所内村
と号し 一とれより 以前 中村と号す 今 當村ふ
あり 此の 御所内 假惟喬王の 暫時を 由せたるに

此地小居伝を武佐津のこゝ古産門に出と

○雲大の神社 所新日村にあり古伝未傳

惟喬親王勸修したまふ如ありと云

○雲大の神社 日村小あり古伝云一條院寛

弘八年卯年三月十日野田村の氏瑞光瑞光と

蒙るこゝありて村外に出く四の中を覺るに古

木像ありこれ其志こゝあり冥夢にハ我ハやん是ハ雲

立神靈則素こゝ蓋馬ハ子やち戈やち頻らう困らうとありこの東の

方の忌に任せんとき海うみよりこゝ崇たかべい分われ

と祭今其忌成お雲山と呼よぶ雲大の神社と号

しまむ彼木像のありこゝ口とお雲地と字を

そに世田村の社をあまあまありてこ田にこて除

地あり室永七庚寅の年彼木像を誦まりて

河津院の像あり四十八の後光多破被破換へて

甚田日より運こきこをありし御み足ありし木こ佐あり

亦あまありし家かに縁託たくとありしけこもあり

と志せりを奥書に寛弘九年子の八月とあり
と云く長梅と云くは神道に本像のそとらふ
素盞馬の神異何ぞのそとらふと夢に本
像のそと志りたるふべけんや例の本地垂迹と
祝んと歎く殺^設た言ふべし

○照福寺 日村にあり

近江國樂地志畧卷之六

長 寒川 辰清 編輯

蒲生郡第七

○武佐村

御新内村の東

あり申ふ道の段次なり順和名抄に必
佐乃口の名を載り今必佐乃名なり
額よりよみよの武佐中見系為乃波蘇
政乃純小と武者乃文字より色り

孝道の祀云武佐乃宿を經て山乃前
とふところと色徳とて月色町ふあり
常好く祀る引乃山の野乃志のり此
と

○淨宗院

武佐にあり淨土宗

安土淨宗院乃末寺あり

○長光寺村

武佐野乃南あり

あり村つきあり長光寺ありと以村の若くは

○長光寺

分長光寺村

あり武佐ととふ是なり武川綱乃村
割麻戸皇子乃建之なり縁起畧云聖徳
太子者蘇我の事なり太子乃婦人高階
産ま修て名ふ^{左記}は懐めり太子若曰如來
知仏道生る子聖なるん女身ふ淨あり
紫社して淨宗の衣と名して年産を
産へ娘云^妾あり安産世を若くや

不^レ然^レとて 後法興元年二十一壬子の年
二月十八日吉子所と云ふ所の地ふきり
自精舎の^レとを^レ崇^レり舎をよ^レび障樓
信坊等と建^レ立^レし彼白檀を以^テ階^ノ非^ル
身^ノ子^ノ親^ノ善^ノ此^ノ像^ノと^レ建^レり彼家^ノ名^ノ乃^レ之
小安^ニ重^シ一武佐^トと^レ改^メ長光寺と号^ス
や云^フ是^レより^レ出^ル考^ス買^テ自^レ乃^レ所^ノ字^ノ大^ニ運^ス
と^レ不^レ然^ルあり^レ刻^ス出^ルの^レ長^光の^レ地^ノと^レ葬^ス

早^ク長光寺^ノを^レ藤大^ノ明^ノ神^ノ乃^レ中^ノ地^ノあり^ト云^フ
此^ノ縁^ノ記^ノ一^ノ卷^ノ初^ノり^ニ老^ニ蘇^ト表^ス藤大^ノ明^ノ神^ノの^レ事^ノ
と^レ長^光の^レ世^ノより^レ生^ル事^ノを^レ藤大^ノ明^ノ神^ノ乃^レ系^ノ
下^ニ又^ニ志^スを^レ其^ノ所^ノに^レ記^スす^ト云^フ乃^レ事^ノと^レ志^スせ
里^ノ長^ノ按^テす^レ小^ノ盛^ノ衰^ノ記^ノ等^ノ乃^レ中^ノあり^ト云^フ
の^レ事^ノ中^ノを^レ志^スせ^リ大^ノ畧^ノ乃^レ縁^ノ記^ノと^レ志^スせ
乃^レ今^ノ小^ノ齋^ノあり^レ縁^ノ記^ノ一^ノ卷^ノ甚^ニ鄙^ニ俚^ニ編^ス
ふ^レた^レ月^ノ生^ル中^ノ記^ス法^ノ興^ノ元^ノ年^ノ乃^レ年

号不審なり書稱乃自号之孝徳天皇
の大化自維始之始後敏徳天皇智の朝並
小自号多記と凡十七年と武天皇此公
鳳来維乃後持統天皇維自号多記
十自文武天皇元自より四年よりつ
まゝ自号なり一自小姓一自号と
て大宮と号を自号以後自号と後一
く不絶未知法皇元世乃自号ありと

是書安なり古人多武佑寺と云ありハ
武若の御りまゝ自佑之法今明の精舎
何のの日日廣地墟して一寺終よ一小堂と
なるもの言宗なり已往乃臨臨石干
今あり寺信云自天降来と物なりや
そたる一夫ばかり園と二天降喜色の一
あり盛衰他よ云重衡生捕色馬馬測
乃星城寺と長光寺ふまいつて書号此

出前子急稱一々ふ去乃与々武川綱が村
刺上官之乃建を与り子子大也教乃常
徑乃精令二十八部流擁後乃与院と一々
法苑精讀乃夢出り瑜伽振院乃喜法
里中持与信小祝を石々々々々々正之位
新右左衛門權中持平乃躬厚を衛とと
志々これと今乃世々々々々々此流如と
りのとれとと云一六乃知とと老蘇

處々二十日町あり茲更記と正書と曰
新右軍 經久のめりと目録部々々々武佐寺ふ
皇之進武將と依隆幸千江長光と云々
古云記云文和二年正月十二日將軍依年於
皇之上御之江別 武佐寺毛利 敬と正本十
二月二十四日乃乃曆代皇代皇年代累記文
和之通十二月廿四日後光嚴帝隆幸江別
武佐寺

○長光寺山古城址

長光寺村の東

山の山あり元龜元年庚午五月九日候
長光寺の城とすくむと徳政の
記ありく

○法性寺

長光寺村の東あり

○野田村

長光寺村の西あり

○金田庄

○金剛寺村

金剛寺と六角佐々

木宗永謙ゆり六の地と古昔ありいま

野田村の名あり

○長田村

野田村の西にあり

○九星村

長田村の南東あり

あり九星之節在野田の雄武の下の領代と
寛小在城とあり城址あり墨山公方御
在世の時多言頼公より永宗より木村

九里水警固より舟運多し此荒去乃後城當
より雄をくみ山尾城乃如くは徳人
中世より尾居城ハ高下あり文貞父作事を室
よりあり一統家女正園東上板意政去より
属より出取を齋祀小出九里猪島如列り
お齋祀よりあり

○枚畷村

九里村の西にあり

○齋野村

枚畷村の南にあり

○粟郷村

齋野村の東にあり

○上田村

粟郷村の北にあり

○西宿村

上田村の東にあり

あり長光寺の南にあり中山道の大路なり

○藤田郷

新得子瀬西村にあり

○馬淵庄

修徳村岩倉村長福寺村より去保古傳

天武天皇大友皇子とたつひ赤なれり赤

そまゝの般方をけ地うりまゝにたすひ一乃
剛より馬の飲ひるの氣力快好よりそま
急よ退くこととほりけり去の地を号し
て了剛の庄と号すとす

丈木集

為相

日かきぬ渡せまゝ剛もま記け今とせぬとせぬ

○西村

西高村地集南にある

○真光寺

了剛村のあり後と宗

安土津麓院の末寺なり

本村長門守屋浦跡

今の庄名が地也

と不難波我地を長實孫弟曰本村長門
守重成之園白秀次乃家老本村常陸介が
子なり秀次公生害の時本村常陸を妙心
寺として切腹を平時常陸が妻重成を孕
て故郷に別馬剛より隠れ居る後宗を
在に別の大守六角宰相美々秀次を

所馬の友より常陸が好むと思ひ重成の案
の時よ出の人の名を順まひ治へられを秘
藏せしむると実子の名を〜軍学細御方
乃道六巻十巻のころや〜十ふくの
同修陳〜後大坂の筆城を七百石余の
支配城中の卜筋四六に〜の第二と稱を十
九歳〜して付死を井作掃部頭小姓書友
長之部付主と〜長按〜依〜本宰主

郷〜不志〜依〜本義賢乃子義治
不志〜後秀次乃〜又〜又客〜を後
系師笑蔵〜病死を義治の子定治
秀利の右右〜ま仕〜近江乃〜
を重成と書育〜と〜兵常陸が
妾乃故口中〜又〜知〜出産せ〜
〜

○妙威寺

子訓あり法苑

宗貝^{具死}是山妙感と号を日像上人の如く
基なり

○子信信村

馬淵の中央なり

あり村あり古伝云惟喬親と云古の地なり
葬子信信親と云世にあり名と云云或云
宣也上人古の地なり子信信親と云
也のり名なり云云

曼多利羅堂

子信信村の西北なり

法身あり古の古者大伽藍なり
吉祥院弘法院あり号を信房と云
人皇女十代淳和天皇乃所創なり
弘法上人号を此冥場なり一に名無の云
子信信村一時乃慈と云と云人ぬ尚を旧迹
と云寛文中中より少く料堂ありて傳
教大師の乃自十一面觀音曰て之の像
あり一に満庵和尙村老より傳るなり

冷泉寺の傳とそ

○了氣大沼神社

同村の東南にあり

古伝云て武王の征勅徳一をうやまうるなり

嘗嘗天皇大友の皇子とたかひきられ去の地

よ来華々るもすく徳をたまふ一乃剛と

るるよ願ふ一をまのきか仕仕健

ゆして天皇遊れりすを地とりのゆき

よ地とる測と号して皇を祀ひありるの

き日仕健よりりりり一徳とつるる事大

以神と号すと不伝用一のりき伝なり

○冷泉寺

了氣神社の傳と

あり程宗より大空宗冷泉寺と号を實文自

中浦庵和尙乃同基なりゆつ浦庵の脚

乃日大乃地り記りり曼多の経書乃日迹と

名程より履せんとも志つて村老より徳来

傳及伝乃子自十一面口々王の像等い

此地より移し堂宇をくんとしを禪宗の
寺とし今の冷泉寺是なり

○十禪師社

同村よりあり是也

乃曼多曼多の鎌鎌をくわす

○供養塚

乃南の傍よりあり大なり塚をくわす古俗云惟
喬親との墓なり惟喬親王と云の地
ありありたてまつりて子供を誂し曼多

鎌鎌をくわす村と名つけ子供

佐村と云村老乃云古の墓の中大なり石

櫃櫃あり中より黄金乃二鶴ありと實文

自中福留平島乃地を解き此日比

ありと云て古武をくわす佐良鎌をひ

くむるよ古武のくわすこころくわす果

て石櫃あり蓋をひくわす同を名れを買

皆り此石を以置上と云遠くを来を以

法めより年中 小燥灰のど紀由 堀あり
あれよりりのけえよ 小岩あり 傷よ古記
鏡一面をカ一振 隙粒のや如くなる 水昌と
くあれあらく 余物と一いまをさあり 紋殺
くも迹より二丈余も あく人々 地盤より十二
之間解買もあく一 四子みふ 田池より墓
も 瀬換して一 換めとあく 堀敷殺より 迹及
高徳ありて 了若くや云 長梅とくよくいダ

いもなきき人の墓あべー 情半姓名乃
あれごとと 昔冠餅兼乃墓とあひく 屋
和とあく一く 君兼子備ありく 紀あり
せに 況何乃 梅もあく 高き乃 墓を飯く
そ 積悪の町く 知くく 福富が 取斬 絶せく
空 埋りありけ

○御信塚

是信貴塚より

町 浮糸小乃 方よあく 大あり 塚なり

去御門院御宇法然上人^弟子任道悟安楽悟
殊對せしむ死骸を埋の塚なり久保二自
の以村老二の墓と述^書掌て法然念佛者修
の法を具はるを因判ありこれと誠任道
安樂身命とありしとて修を法いよはよ
ろふおひて二修を修を去保或云後代二修
かたあま一寺を判割し安楽とと号し蓮
池と修之任道池と評蓋二修^修の勸業の原と

去ふとあり一子の流傳の任道一法
と修^修とて七日七夜を後出のやまろを号
して子信信村とふありやま正安の自中四
縁の難よの河を寺焦とふんぬと云し
いま村老の同し安樂寺任道池の跡を去
志多し任道房姓^姓源頼親の首痛実遍が
子なり今梅ヶ丘村に比叡山子信信料なり

○岩倉村

子信信村^信あり

○福寿寺

岩倉村あり

岩倉山福寿寺と号を禪宗梅嶺和尚の
開基あり

○岩倉山

○長福寺村

千僧住村あり

河村あり岩倉山の半腰あり家数三十餘
高口百石坪の村あり村氏氏岩倉の石と
とらふ石とを名を名多し

○東横園村

了測の東南あり

あり村あり

○横園川

源をひるまじ

川あり一をた久良川あり一を甲斐郡岩
根山より出流曲折して東河村乃水
源あり一源とあり西横園東横園の中
間を尾菊と稱す源を仁保川と云
ふ河子入あり

○西横園村

東横園村東南

りあり

○善光寺川

善光寺川

○長者石臼

善光寺川の東の

堤のりよりあり長者一圍七尺浮去際より上
高き二尺余指長者の石臼ありとふ善光
寺川と号するも古乃臼の上より善光寺乃
石と重なる石ありとふ長梅寺より善光

善光寺公乃時善光寺の本寺を洛陽より

うつし赤くしなるふとあり古乃と記

此田より善光寺あり幸石臼乃横あり

そのもあき心善光寺ありと云なるべし古

老乃石臼も心好くしは毛巡歴のついで

と此石臼を名りて實中臼よき似とれど

毛を名りて臼よりふ善光寺ありと記

善乃古より善光寺ありと記

比多居の相あり乃自然と幸子埋
道一ありいほく一居がたけり人毛を初り
ふくみ水神とせんやあまの此人まを序
て是を初れどもそ源をたけはかきゆ
よやむ

近江國樂地志畧卷之二十一

寒川辰清編輯

蒲生郡第八

○火蹟店

古老云鏡山乃辺

状拾して云ふとそこの疆界を法乎いらり
よせを江家次第よいつく御齒園乃を有
候鏡用近江火切云く範多解性云六乃
候を江火切乃候を專可辨是より

てやがてをふ乃鏡山乃翁と評せらるなり
後形類々我もの世ももそらぬゆゆ
みぎ佐きささくつけせらるる

○陰村

西枝開村の南東

に河り中山道の往還大路なりいまま
弦次ふいあうとれとも首を結ふ繁昌の
地より陰の翁とのよぶり陰肆もあり
遊女もありりやあ乃やころの傀儡がみ

やあまあうて後形乃世の中はう記身なり
そまう教もあやあひまうれどもあれど
けりの方を懐ひかきをりを後形ききあひ
て懐たうひしきふとを名抄よそく
を名抄の傀儡を遊女のこくせり信問を
のり字集あも吹遊女日傀儡と記せり機
集あも字集傀儡とあまを遊女も字集あり
その信うを法ふらと久し傀儡を漢

高祖年城の圍を解し陣まが保すうあさ
木偈人^偶を^凡めりりあつふとなり侍学
大成偈偈の部とんたりいま人形とま
そののを偈偈師とふそより朝能那哉
偈偈記の男を木偈人^偶をま^い女を淫と賣
のそむきんく^りを平記云觀應二白
八月十八日源高氏郷賜高念入道進付の宣
と下^る息^通に^出陳^陵名^云て^正本^のさま

記云八月二十日お軍お立^陣者平治相終
系師本回^遷那^王十六と^中兼安田自三月
之の曉^鞍馬^寺と出^り世^乃中^の脚^色
上^よと^そ無^由なる^れ同^名の^兒あ^と若
紗^と指^{あり}そ^白色^に乃^陵の^若と^そ最
す^年又^髪と^あれ^と利^上ひ^とら^懐と^持り
刀^錢と^常と^され^とけ^り鳥^帽子^乃あ^と
里^押掛^とり^り望^能り^とら^ると^陵本^所え

糸りー山もまゝ、鏡と号するありは
やあつひまきゝあ乃のさより目々々々うの山形
かゝよ似れをふもや叫る吳詠をゆき
たきゝして後苑考をそまふ後乃若もぬがく
を訂正せば幸甚なり

家集

家持

口か妹がみり山の紅葉をたふる雪も山をたふりけり

同

源順

名かゝあふらまゝさうさう鏡とわづらうまは新文いけし

同

無盛

走も名在やけう先かみ山形す急をきそ乃あうりハ

同

産浦

曾母と鏡の山もさうさうかか川もつてさう海さうけ

六百番歌合

經家

かみ山若ふく海やうらうらういそ地まきまぬとび衣うさ

建保百首

順徳院

行ふと此山の老の月を新く又くするなり

堀川百首

仰時

人形もせぬものゆゑの嘆きもなきありて 隣の山よりなごらん

拾玉集

慈徳

妻やその影をうりうりゆきし山ありに波もたはれ曉

現存六帖

雪ふれぬるぬるの吹ん山ねもさあざり面づくせり

古今集

大伴尾高

かみ山をまきうりて君をいふも自経ぬる老や志ぬる

臣按むるりある歌古今著聞集には教位

教位が音なりとあり是ハ七史尚書會の

時教位に保つてとありなり 元來是

がうめり古字なり

日

河内ち 親行他々大嘗會ありとあり 是ハ乃明

河内ち 親行他々大嘗會ありとあり 是ハ乃明

ふふの形を偲ふそれと日尾山と不古今
集ふを江のやめみれ山とまこれとよ
とをりりりり

後撰集

素性法師

鏡山やまのきくをうたふれと絶あくを秋をんりり

拾遺集

坂上是則

むの色も編りてめり鏡山^春う後乃^新新や尼也

何花集

光世親王

かみふんそちおきき^新家^新のりりまにやせりり

新勅撰集

慈徳和

大宮のよひや風ふそなれ^新の山又月かへり

夫木集

衣笠内大臣

^新あし^新しめく山の雲のひみ川岩瀬^新まきりり

長秋御原

後成

これ^新のを鏡の山とまきりり^新とせの^新新

拾遺集

定家

かみふらふ月をなほあはれいさめさ家の満る

壬二集

家隆

院あきる月の西新しけり公もみまきなり

常任院

ふらふらふをいかにあはれいさめさ家の満る

装點 新粧 京洛 辺對 湖 歡笑

對山 妍旅 愁悲 解掩 明鏡 昨

日白頭 今年

○仙人石

鏡ふよあり仙客

の園基形よ似るうかしゆくよ左つらふ

○星ヶ嶽古城址

つらひまけ古城野

例郡よかしゆくもあはれ鏡成ハ依り末十代

尾形二男定重名祖なり兼久知よ尾張あり

お死せし鏡をあつ耐久徳二代目なり是智郡

日度氏を去乃鹿流と云く鏡を伴い尾形

の鏡取あり星ヶ嶽よ在城あり 院陸奥守なり

親^規息谷 彦正定頼公兼頼公之志切^切有之承

福治 永承一族淺井之頼此 逆意 眞一 菊

郡 迤邐を兼頼公星が 傳之 宿陳 永承

一族と進伏をそと良高 祝志切^切あり 菅原正之

信長より出^祝頼之留を後新承所知

○相原郡

安養寺村 東村 古川

村 表^表尻^尻村^中 小^小表^表村^池 田^田村^竹 川^川村^上 七^七村^と云

○安養寺村

鏡村の西南より

高六百石餘の村あり 古法不 性古を安養寺云

堂号より 大伽藍地より 南村 兼その 界内あり

と 不 今 石 佛 在 塔 亦 在 在 是 事 事 事

○上野社

安養寺村の法

上野山より あり まつり 堂より 乃 神 牛 頭 之 相 原

七村の 齋 古 社 あり 古 儀 云 亦 名 乃 妻 巴 山 吹 之

まつり 新 あり と 古 乃 託 掃 用 子 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

傳 あり 古 月 節 宗 礼 競 あり 同 三 日 水 是 之

て神子二人神事 当人ホ集會ハ森茂之座
神子高ノ御旅所一是リ社傍廣林ハ神儀等
と号もそ名宗比叡山正光院乃末旨あり
社司如佐友と号もそ名あ難守村ハ佐佐木
毎自正月 名よけ名替

○御車墳 ミクルマツミ

右山乃内きこり

あり事詠いまふ分得とては

○東村

安寺村乃あより

○古川村

○表尾村

○中小尾村

東村乃ありあり

終村あり表尾村日吉所村里村あり里村ハ
鎌倉村より古儀也獲名と也一里也
ふんま いとろ乃穢多なりとふあり
形力り紀雲張あり 祝 聖獲名乃中志候
郡よ法まびらう志ろ

○池田村

池田村と秋多村大

橋村西村と云西村と云々村あり

○竹村

中小森村のやあり

○鶴川村

順惠村のやあり

鶴川強く今不知仁勇の士と云 屋敷の色長補佐

の老臣と云ふと云ふ小長流傳持惣從師り保

針せられ有急よ〜れ〜

○光任寺

鶴川村にあり一向宗

○下神社

同家あり

○鶴川経塔

同家あり新傳

今按てよとよ川の傍にれを古昔精

と川に流穢穢せし羅陵とんげのよとよと云

○下鶴川村

○七里村

鶴川村の西にあり

○磯部大明神社

七里村にあり系々

神流まゝと云ふと云ふ石部乃神社と云川

○ 齋子ヶヶ石部殿延洲訓とありこれに是年

○ 葉師村

七里村の南あり

○ 古村より七里町あり昔に葉師とて大

寺ありけり坊も六坊ありとふしよとら

ふよ一坊とあり

○ 葉師寺

葉師村の南あり

かの旧跡あり

○ 山中村

葉師村の南西にあり

○ 墨屋村とらふ

山中村の南あり

○ 小上村の北六町あり

○ 猪子大明神社

墨屋村の南あり

毎年四月二日この日まつるゆゑ子猪

大明神社あり

○ 左禰庵

日村の南あり

安土津殿院の南あり

○ 西長寺

日村の南あり

東中郷寺のりりり寺あり

○吉祥寺 同村より浄土宗

系知忍との末より 同村より浄土宗

○善正寺 同村より浄土宗

安土津庵院のりりりあり

○光壽寺 同村より同派

○後戸村 小口村の三町系

りりりあり

○苗村大由神社 後戸村よりあり社祀

小いより尚社権儀の由来と考ふる人

六十三代冷泉院の御宇安和二己己同

郡河守村安壽寺 聖徳寺此河佛令新聖村

能内山殿の寺のむき昆沙門てその廣く朱

能より〜のたよ〜我進〜一乃氏民の飛

急を減せ〜の退つた〜食窮苦福の少〜

伏室をとりけんがためよ 早者のりり境よ〜

色り志うりとくとも 為成体へき神社もなし
是と留るべき 臨新もなす一とるより一と計
ひまくと糸示したまひ 市れは多門を著せのこ
まつく家を鞍馬寺の臨をとして 恐しひ示
志くけきころよ任せり 今をうけらるる神社
の境より終を意とまると 祝示に 家重命あり
伊法をたす 祝く 思業を知らざる示 さまり 愛お
後の死よりふ古巻の 留示に 有の老作り 可れり示

存終りかふくばき志かへ 悔しきまごべー せき若
夕ひりふよりく 明神後厄と 淨留ありけり
い等の後戸の 星よ一人の 釋厄あり 去のちと
修身くねきふ 厄を著く せき 我出の志不
の田代も志りせり 世内ハ友と家持く 著り
徳りとそまづべー 濟をさす せんそまづふ
唯人か海しきまごべー くのやきころよまへ 留さん
と 志しめさむ一の新なる 志 後成現し

とらまけなより 明神ありハ母がとめよ
とら苗成穂ときーめたまふ枝あけとら
かその首とらーを大あり枝村と愛ぶて枝よ
まぬとらー愛ふ危云希^{異記}真乃らひいとらーやど
お路の枝成穂と社壇の麓扉を枝ーひさき
とらー葉自席おとらり 早業とーつかりて
まの百自葉よとらり くれなよりて苗村
大明神と号ーまけりけりとあり三節の系

今之地を新文 二十四三年か一室の大系礼あり
まこの多よちれを自れどーやとら内
まらとびやのより 極ふ ぶん儀の神靈ふ
て海ーまをより中法ふより せり子
細きれありととらも 能き神秘なれを
これとまけりを云い

○寺孫寺

日村ふあり一向宗

○小口村

園倉村のわらり

○橋本村

山崎村の少ふあり

りんきふ今昔物語に
ある所の安美の橋本
ありていり安美を
調とありていり
あるべしこの地安美の郷
ありていり橋本村の
前より川ありていり
橋本川の水原ありていり
ありていりこの川あり
ていり橋と安美の
ありていりふりていり
ありていりありていり

○牛頭天王社

橋本村あり

○之寺

同村にありていり

○新善寺

同村にありていり

○業師堂

同村にあり

○地蔵堂

同村にあり

○川上村

信法村の南にあり

○若菜八幡

川上村にあり

○光徳寺

同村にあり

○地蔵堂

同村にあり

○安古編 あこへん

順和名抄出り金

橋戸村上昌村弓削村東川村佐治村原惠村西
川村以上七村をふり

○倉橋郡村 くらはしり

上昌村のふり

信村を小門村とふ

○西表寺

倉橋郡村

所り一向宗

○安古寺

同村より同宗

○安古大明神社

倉橋郡村あり

正一位安古大明神社大明神より安古神より法皇

より安古に毎箇月奉祭祀地あり

ありと不承王十段師匠依八幡之神を安古

大明神と申社あり櫛色二社あり

あり

○安古川

日池の川筋あり

源を金剛峯より本郷村川高平の川寺尾

村の西より落合日野川とあり音巻村の東に
て駿田川と落合安吉川と号を下りてハ
川と不吉ふやう流氷庄村上昌村の中間
あり西小折とそ堀川と名へ是を仁保川と
呼まふ下ありは横実川と名をけ村の中ふ
ては安吉川と不橋あり安吉橋と不吉の
そへは徳吉の橋ありと不吉を石を
たう今昔物語小に安吉橋は是ありとあり

○二十里

○上島村

○天満三神社

神宮公乃具あり

○光瑞寺

本よりんる乃ま川あり

○大安寺

○三割村

浄土寺村の西あり

上島村ありまつる

同村あり一向宗あり

禪宗

川上村乃西あり

あり 端 ^端 隅村と 新村と 不

○山之社

神日古乃神あり

○八幡社

○阿弥地寺

○正福寺

○善体寺

○東河村

横園川乃傍あり

○善堂八幡社

○玉峯寺

道寺乃より山あり

○万教寺

西教寺乃より寺あり

○善任寺

○信濃村

弓削村あり

同村あり

同村あり 浄土宗

同村あり

同村あり

上昌村乃 あり

東河村あり

同村あり 信濃版

同村あり 坂あり

同村あり 一向宗

庄村乃 あり

○業師堂

伝法村あり

○栴原明神社

同村あり

○須惠村

栴川村あり

○永照寺

須惠村あり

○吾通寺

同村あり

○下須惠村

須惠村の東あり

○觀音堂

○八幡社

○西川村

西核園村の東南

あり西川東川と村と蒲生川の端あり

西川備前守在任慈仁礼小池小出屋敷乃者

頭ありその後美輝將軍の化界の寺西川新宮

尉曰小十郎又子歿死を

○淨土寺村

倉橋郡村の西

南あり

○竹林寺

淨土寺村あり

巻尾山竹林寺と号をおする釈迦様あり

古傳曾野寺千坊乃古伝ありとふ

○号松

竹林寺あり

○天神宮

竹林寺乃法寺なり

里津古なる庄村林村乃法寺あり

○竹連寺

同村り竹り福宗

○分岐道

津土村り福宗

芝山乃あり古伝ふ古昔和泉式部あり

あつとあるとそ 曾野寺乃法寺とそ

あふきとあるとそ 祇園寺なり 也きの様なり

乃入おのり 芝より分岐とそ

○女坂

大保玄龜女小勝町

り 難派とそ 即ち茶とのこり古乃乃なり

法、あつとふ女坂とふとこりいし

警昌の堂祀の陰坂とふと 大自攝子表川裏

門とふ乃孰と男坂女坂の君とあり

つまもいふの巻岩湯崎新田なるやありしもの
名あり 吾地寺懸菜のそ池の如飯なるを和
若ふより附會の類とあせり

○川守村

林村の菊菜にあり

○子嶽

川守村にあり

○龜王寺

嶽嶽にあり 安吾

山龜王寺と号し和秀ふより 此寺是なり

本寺業師以基の代なり 録記畧に曰持統

皇の御宇 以基建をきりやまらあり 光明天皇
乃河守和洞と云 九月二十日再建あり 安吾
吾地寺と号し光仁天皇此室龜八年の改當山
の林川守村か一人の員男あり 少壯時急り若
法く大和公を住部 乃者より或日一人の員
女忽然と記より夫婦の契りともあそと云
戸塚女乃云われ我を人問ふあり 比前世の宿
因かまらぬ妹皆乃かまらぬとあせりとれ

平本は乃之をりされを形んとそめし
玉の葉をのこりし時急意慕の情り
少極平本は乃之をりし時急意慕の情り
つとをりし時急意慕の情り
急を清くし之川に彼をひくきんふ
あり刻南と小奇進をかの波より竜焼
小ありし其終ありし時急意慕の情り
初刻を終事障殿より一掃を急意慕の情り

ためし竜王寺と号を福つり兼曆二自十月
下旬六乃之と歳山に持山後これを據
急鳴を山後忠をたよへるが急意慕の情り
急意慕の情りありし時急意慕の情り
急意慕の情りありし時急意慕の情り
急意慕の情りありし時急意慕の情り
急意慕の情りありし時急意慕の情り
急意慕の情りありし時急意慕の情り
急意慕の情りありし時急意慕の情り

雷電してやうはも六の陵の法りともところの
目打をぬきけれどもあれをふゑ二のあまう
法りてありそかう奇物とてか軍義政義晴
佐々木定頼細川晴元佐々木義賢古波新藤等
乃禮文教也ありと云く宗名むういへる台
今々天台の禪院より栗原源とつあま南寺
の山に塔あり且按ぎふ碑とてのり
とつえ合と愚俗のふく後とまるとつ後

志賀郡之井寺の鐘をかくうこくくたるの寺の
あつとふ竜神のあてつあつあまあ
蛇女有るはあまもるも谷よりとちあま
碑もこれとあつあつあり
来歲月と鐘をわかれとと色めつえ合あつ
ふく後とあつあつ恒果ふあつあつ日中地畧白
延暦十六年十一月辛丑始用新鐘を併摺
咲茂松尾社施七太寺の野寺云く同日天

長久の六月十五届迄引く修三十人於野寺
増廣大般若經坊水害也云々
新古今集
長久

有明の月の也ふと縁てむ世と此子に記さるけり

和名抄

言ふまじき事々グマと海晴々ゆきの世との入るる

三三

さうふん一むのあまに最妙の世とのうの世とさうさう

家隆

一むの世との苑はうさうゆらと池の世とさう

○三林社

うの世とさうあり山岸

川中村の産土社あり

○吉田お重の重賢居宅伝 同村ふあり是也の

射洲の巧まなり事伴の人お川よあを世
守定所あひ山の月よ城あり吉田ハえ味世智
那うさく冠え岩まの福孫なりとふ

○小野時兼を安んず

目村ふあり六乃

時兼何色の代の人とふと忘れぬ

○西光寺

目村ふあり何光寺流

○東光寺

目村ふあり一向宗

○庄村

浄土寺村の菊西

小川と隔てあり

○願成寺

庄村ふあり

○林村

川と村の東南ふあり

○縁塔寺 えんたつ

林村ふあり本尊所

弥陀如来の作像像二天守はうり古傳藏生

之堂の左一なりとふ之堂といふ新傳藏生

堂村の藏生堂業師村の大堂共堂なり

堂なり

○正行寺

目村ふあり辨織寺流

○系通寺

目村ふあり

○常智寺

目村ふあり一向宗

○古紙

年久紙地多うとふ

目付あり赤紙



明治七年二月廿日校了

安政憲三

